

向井哲夫著

『淮南子と諸子百家』

齋 木 哲 郎

本書は『淮南子』と諸子百家の關係を検討しようとするものであって、『淮南子』という書物にまとめられそこに創出された『淮南子』独自の思想的意味の究明を意圖したものではない。逆に、その際の著者の目的は「『淮南子』の各篇の一つ一つの中心的立場で書かれており、大半が諸子百家のいずれかである」というのを前提に、『淮南子』に盛られた諸子百家の思想の狀況を確認することであるから、その作業は『淮南子』を各篇ごとに解體し、そこに諸子百家の思想やその痕跡の發見に費やされることになる。こうした作業を通じ、著者が證明しようとするのは、戰國諸子百家の活動の終焉が通常言われているような

秦漢の際にあるのではなく、漢代に入ってから以後も、彼らは一學派として存在し、永く活動を保っていたというにある。そうした目論みで構成される本書の内容は第一部『淮南子』と諸子百家」全六章と第二部『文子』と『老子』の研究」全三章からなる。

第一部第一章「覽冥訓・本經訓と陰陽五行家思想」では陰陽五行家の思想の特質を主に郷衍に關する史書の記述や『呂氏春秋』中所見の陰陽五行思想等に求め、覽冥訓・本經訓中に見える「精」が天に通ずるという説、天人相關説、悠久の過去から今に至る歴史を述べること等は全て陰陽五行家の説であって、その全體が彼らの思想の所産であ

るとする。そうして、同様の思想や記述が認められる天文訓・地形訓・時則訓なども覽冥訓・本經訓と同様に陰陽五行家の所産であるという。第二章「主術訓と慎到系法家思想」では、戰國時の法家、なかんずく慎到の思想に法家思想のメルクマールを求め、主術訓中に認められる形名參同説・君主の認知力の限界やその主觀的判斷の抑制等はそこに用いられたテクニカルタームも含めて全て法家の所産であるという。第三章「齊俗訓と田駢系道家思想」では『莊子』天下篇や『呂氏春秋』に記される田駢の思想や行跡を分析し、そこから得られた特質と同等の内容を齊俗訓中に確認し、齊俗訓が田駢の思想によって構成されることを説く。第四章「說山訓・說林訓と名家思想」では、篇名の說山訓・說林訓の「說」自體が辨論や比喩を意味する辨論修辭學上の概念であって、そこに盛られた説話や比喩は當時の論理學の反映、なかんずく鄧析の「二面性」の論理であって、これらの二篇は當時の名家の所産である。第五章「人間訓と縱橫家思想」では、『鬼谷子』『戰國策』『戰國縱橫家書』を通じて縱橫家の思想の特質が抽出され、人間訓

の記述がその抽出された概念と一致するとして人間訓を縱橫家の所産とする。第六章「修務訓と墨家思想」では、修務訓中の「自己犠牲的實踐を強調する」部分に墨家思想の存在が見いだされ、補足的に功利主義的思惟や天子と三公・九卿を説く件が墨家思想との關わりで説かれ、修務訓は當時の墨家の所産である、という。

こうした展望に立つて著者は『淮南子』という書物は全體的には道家思想が中心になっているにしても、個々の篇は必ずしも道家思想に基づくものではなく、先秦期のいづれか一つと特に關係する「(二三八頁)」として、『淮南子』の各篇と戰國の諸子百家との關係を

原道訓・俶眞訓——道家。天文訓・地形訓・時則訓・覽冥訓——陰陽五行家。精神訓——道家。本經訓——陰陽五行家。主術訓——法家。繆稱訓——儒家。齊俗訓——道應訓・汎論訓・詮言訓——道家。兵略訓——兵家。說山訓・說林訓——名家。人間訓——縱橫家。修務訓——墨家。泰族訓——儒家。要略訓——道家。(同頁)

のように示すことになる。

ところで、一九七三年、河北省定縣第四十號漢墓から竹簡『文子』が発現した。實は今本『文子』ほぼ四萬字の内、三萬字ほどが『淮南子』中に見えているが、これまでは今本『文子』は偽書であるとみなされたことから『淮南子』と『文子』の踏襲の關係は問題にされることはなかった。それが今回の發現で今本『文子』の眞實性が俄に増し、『淮南子』と『文子』の間に何らかの繼承關係の存在が豫測されることになった。けれどもこうした説が行われることは、『淮南子』の思想の淵源を戰國の諸子百家に求める著者にとっては看過しえない大問題である。それで著者自身が『文子』について（『淮南子』との關わりで）検討をせざるをえないことになったのであるが、それが本書の第二部である。第一章「今本『文子』の眞と偽」では、竹簡『文子』から今本『文子』へと分量が増える過程で『淮南子』の文章が取り込まれたといい、第二章「竹簡『文子』について」では、竹簡『文子』の特色が道家思想を主に儒家思想も取りこんだもので、その成立時が戰國末にあることが論じられた。この考察によって、『淮南子』が『文

子』を踏襲した可能性は否定されることになる。第三章「郭店楚簡『老子』」この書の概括的な検討が試みられている。

以上が本書の内容である。こうした作業を通じて著者が特に主張するのは、『淮南子』中の各篇は戰國以來の諸子百家の所産である、という點であるから、この點から検討したい。まず『淮南子』中に諸子百家の思想が認められることの著者の指摘であるが、概括的に言つて正しい。ただしそれは著者が想定するような戰國時の諸子百家が漢代においても學派として獨自に存在し、『淮南子』中の各篇はそのいずれかの所産であるというのではない。戰國から漢代に至る過程は、歴史的に言えば、これまでの封建制が解體し、皇帝を頂上に戴く中央集權體制へ至る變動期で、封建諸侯間に遊説を競つた戰國の諸子百家はそうした中で他の學派の思想と融合してその不足を補い、帝國の思想として相應しい形に變貌を遂げているのである。その途上で著わされた『呂氏春秋』は従つて各學派の思想を取り込んで融合的な思潮に彩られるのであり、そうした傾向は著者が

『淮南子』に對して行つた分析においても濃厚に現われている。そうした他の思想と融合することで肥大化し、變質している『淮南子』中の諸子百家の思想を、どうして戰國時以來の學派の概念で捉らえることができるのか。むしろ、その融合し、變質した部分にこそ『淮南子』中の諸子百家の思想的特質やその時代的な意義を求めべきではないか。確かに著者の言うように、諸子百家の思想は秦漢の際を境として取り扱われることはない。けれどもそれは、諸子百家がそこを境に消滅したということではなく、そこを境に彼らの活動からこれまでの諸子百家としての意義が失われたことから、諸子百家として扱われることがなくなつたということであろう。その上で漢代の諸子百家の痕跡を『淮南子』中に尋ねようとすれば、それはまず彼らの活動が諸子百家として捉えられることにどのような意味があり、その固有の意味を念頭において、その活動なり、思想なりの全貌を明らかにすることでなければなるまい。『淮南子』の各篇に諸子百家の思想を見いだす営みは、こうしたコンテキストにおいて初めてある程度の意味を持つのではないか。

評者の意見はほぼ上述したことに盡きる。ただ、著者の議論は、『淮南子』の各篇が戰國の諸子百家のいずれか一つとの關連で成つたことを自明とし、篇ごとに取り扱われなければならない必然性を何ら説明していないことから、往々破綻が認められる。その一例を掲げれば、「主術訓と法家」の關係についてである。著者はこの主術訓を法家の所産と捉えて説明しようとする。ところが、主術訓の後半は著者もいうように儒家思想が中心で、主術訓自體は法家の形名參同説と儒家の仁義説を君主たる者の統治術として示すかの觀がある。にも拘わらず、著者は一篇一學派を前提とする建前から「儒家系統の錯簡か、儒家思想に基づいて書かれた文章が無造作に法家思想の次ぎに置かれた」といい、後半の儒家思想の部分を除外する。かくすることに、自説と『淮南子』の構成との齟齬を彌縫するのである。また、學派の思想を確定する際に極めて牽強な部分も多い。その一例として陰陽五行家固有の思想とみなされた「今から黃帝や伏羲・女媧の時代に至るまでの世の盛衰

を、政治の得失とそれに對應する災異・瑞祥をあげながら論ずる」ことについてみたい。著者がこの種の思惟を陰陽五行家の特質とみなすことになったのは、『史記』孟荀列傳中の鄒衍の事跡「先序今以上黃帝、學者所共術、大並世盛衰。因載其禍祥度制。推而遠之、至天地未生、窈冥不可考而原也」の「大並世盛衰」の部分で、『淮南子』の本經訓では世の盛衰が對比して論じられることを根據に、「大いに世の盛世と衰世とを對比して論じた」と解したことに由る。けれども、『史記』の當該の文の後にはその具體例が擧げられて「先列中國名山大川通谷、禽獸水土所適、物類所珍、因而推之、及海外人之所不能睹、稱引天地剖判以來、五德轉移、治各有宜、而符應若茲」と言え、いうところの「大並世盛衰」は大九州説や五德終始説との關連で説かれたものである。決して著者の言うような古代からの世の盛衰だけを視座にしたものではない。

こうした例が存すること以外、『淮南子』の思想を分析する際に用いる概念の規定があまりに一般的で、それらがその思想のメルクマールになっていない場合が往々である

『淮南子と諸子百家』

ことも指摘しなければならない。たとえば、本經訓が陰陽五行家の思想であるという場合、陰陽五行家の思想の特質を「有神論」「神話的世界」「天文學・律曆の學との密接な關係」「陰陽五行説」「天人相關説」「氣の思想」「儒家など」と關連する倫理・政治思想」「五德終始説などの歴史觀」「非日常的イメージを驅使する文體」等の諸項目で括り、こうした要素が認められるということで本經訓は陰陽五行家の所産とされるのであるが、著者が指摘するこうした特徴は他の思想家にも認められるもので、こうした分析項目によってどうして本經訓を陰陽五行家の所産と認め得るのか、はなはだ疑問である。漠然と共通する項目を列擧して兩者の對比を行うよりも、兩者が共通の思想であることを決定づける要因を摘出し、その比較の下に論じられたならある程度の説得力も持つのではないか、と思う。

繰り返すことになるが、著者は『淮南子』中に戰國以來の諸子百家の活動を讀み取ろうとする。そうであれば、高誘の「淮南鴻烈解詁」に『淮南子』の著者を説明して「天下方術之士、多往歸焉。於是遂與蘇飛・李尚・左吳・田

由・雷被・毛被・伍被・晉昌等八人、及諸儒大山・小山之徒、共講論道德、總統仁義、而著此書」と説かれる人々が當時の諸子百家とどういう關係に置かれるのか當然説明されなければならぬであらうが、この點に關する説明が全くない。説明を要するところではないか。

最後に『文子』と『淮南子』の關係について觸れて置きたい。近年に至って『文子』の研究は非常に進展し、今日では今本『文子』と『淮南子』の間には何の繼承關係も存しないことが明らかにされている。この意味では著者の研究は正鵠を射ていたことになる。けれども代わって提起されているのは『文子』と『淮南子』が基づくことになった共同の祖本存在である（丁原植氏『淮南子』與『文子』考辨』萬卷樓圖書有限公司、等）。今後『文子』の研究の進展いかんによっては『淮南子』の成立の事情にも再検討が求められることになるう。

（A五版、四六〇頁、一〇〇二年六月、朋友書店刊）